

さくらそう通信

サクラソウの自生地を尋ねて



サクラソウトラスト地を望む
(2000.5.4撮影)



サクラソウトラスト地から周辺を望む
(2000.5.4撮影)



樋ノ詰のサクラソウ自生地

聞き慣れない呼び名かも知れませんが、樋ノ詰は桶川市郊外の荒川沿いにある地名です。かつて荒川流域には沢山のサクラソウ自生地があって、それぞれ尾久の原・浮間の原・戸田ッ原・田島ッ原というように、その土地

の名前をつけて呼んでいました。最近では、樋ノ詰のサクラソウ自生地と呼ばないで、荒沢沼のサクラソウ自生地、あるいは江川のサクラソウ自生地と呼ぶようです。ここには桶川市と上尾市の境界が通っているので、一方の市

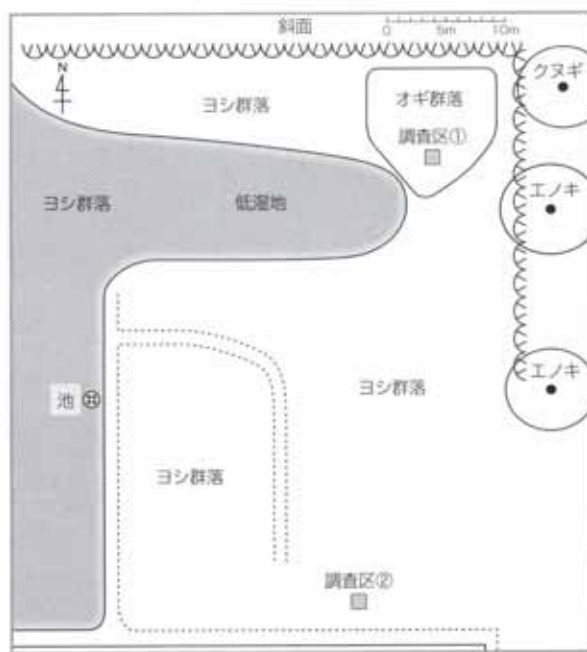
の地名で呼ぶより、ここが昭和初期まで荒沢沼と呼ばれる沼沢地だったことや、両市の境界付近を流れている江川用排水路などによる呼び名が、ふさわしいとされたのでしょう。

さて、上で述べた江川用排水路は荒川下流域の左岸で荒川と合流しますが、そのあたりの堤外に広がっている低湿地が樋ノ詰のサクラソウ自生地です。この低湿地は第二次世界大戦後の食糧が不足した時代に、ほとんどが開墾されて田畑に変えられてしまいましたが、それまでは一面にオギの生い茂る原っぱで、春にサクラソウが群生する所でした。幸いにもサクラソウの群生している場所の一部が現在も残っていて、その場所は「サクラソウトラスト」を設立した人々によって守られています。荒川流域に沢山あったサクラソウ自生地も、現在まで残っているのは樋ノ詰と田島ケ原の2箇所だけになりました。貴重な自然遺産でもあるので、ぜひ守り続けられることを願って止みません。

では、ここのサクラソウ自生地のようすを観察してみましょう。現在ではサクラソウ群落の残っている場所は、江川用排水路の右岸にある「サクラソウトラスト地」の中にあります。この場所は東西に約30mと南北に約60mのほぼ四角形の範囲で、その東側と北側は小高くなっていてクヌギやエノキが疎林状に生え、南側と西側は休耕田になっています。江川用排水路から約30m離れていて、標高は8.1mから8.7mの間ですが、休耕田の水面との差はあまりなく、低湿地になっています。

サクラソウの訪花昆虫やサクラソウ群落の構造を調べるために、樋ノ詰のサクラソウ自生地を訪れたのは2000年5月4日のことでした。この日、ここのサクラソウは満開で、同じ日に田島ケ原サクラソウ自生地では満開をやや過ぎていました。ここが満開になるのは田島ケ原より5日周前後は遅いようです。樋ノ詰は田島ケ原から北西に17kmほど離れているために、サクラソウは冷たい北西の風に晒されて生育が抑えられ、満開の時期が遅くなるのでしょう。

サクラソウの訪花昆虫については、午前10時から午後3時30分まで調査しました。この日は快晴で暖かく、気温は午後1時には24℃にもなりました。「サクラソウトラスト地」の中では、ノニガナ・イワニガナ・オオジシバリ・コオニタビラコ・オニタビラコ・ハルジョオン・ヒメジョオン・ムラサキサギゴケ・タチイヌフグリ・キュウリグサ・ヤエムグラ・チョウジソウ・マユミ・ゴマキ・サクラソウ・ツボスミレ・アギスミレ・アリアケスミレ・ヘビイチゴ・オヘビイチゴ・ミツバツチグリ・イヌガラシ・ジロポウエンゴサク・クサノオウ・コハコベ・ウシハコベ・オランダミミナグサ・ノミノフスマ・カラスノエンドウ・ノウルシ・アマドコロ・カラスビシャク・ウラシマソウ・イチゴツナギ・カニツリクサ・チガヤ・アオスゲ・カサス



サクラソウトラスト地内にみられるサクラソウ自生地

ゲなどの花が咲き揃い、多くの昆虫が活発に活動していました。

この日は、これまでの調査でサクラソウの花にやってくることの多かったチョウ類に目標を絞って観察しました。観察しているときに目の前を飛び回ったのは、アゲハ(数頭)・キアゲハ(数頭)・モンシロチョウ(多数)・モンキチョウ(雌1頭)・キチョウ(雌1頭)・ツマキチョウ(多数)・キタテハ(1頭)・ヒメウラナミジャノメ(1頭)・ヤマトシジミ(4頭)・ルリシジミ(1頭)・ベニシジミ(数頭)・イチモンジセセリ(3頭)・ギンイチモンジセセリ(3頭)でしたが、この中でツマキチョウ(5頭)・キタテハ(1頭)・イチモンジセセリ(1頭)が、サクラソウの花に止まって蜜を吸っているのを観察することができました。

これまでの数年間、サクラソウの花の蜜を求めて集まる昆虫を尋ねて、数箇所サクラソウ自生地を見て回りました。訪れた先々で、お花畑のように咲き誇っているサクラソウの群落を見ることができましたが、サクラソウの蜜を求めて群がって集まる昆虫には出会えませんでした。近くにいろいろな昆虫が見られたので、それらの場所が特に劣悪な環境であったとは思えないのです。ここのサクラソウ自生地の場合も、自然環境は悪くないし、多くの昆虫にも出会えましたが、サクラソウの蜜を求めてきたのは7頭のチョウだけのようでした。サクラソウの花は昆虫が花粉を運ぶ構造になっているといいますが、それなのに昆虫が群がって集まらないのはなぜでしょう。ここのサクラソウ自生地の観察でも、その謎解きできませんでした。

サクラソウ群落の構造を知るための調査では、群落をつくっている植物の特徴を観察することにしました。今回はサクラソウ群落を真上から見下ろして、縦横1mの四角い面積の中に生育している全ての植物について、種類

ごとに繁茂している割合(被度)と高さを測って表にまとめ、表から特徴を見付ける方法を用いました(4頁表)。

春には同じように見えるサクラソウ群落も、夏や秋に群落を覆うオギとヨシに注目すると、調査区①はヨシが13%で、調査区②はヨシが3%とオギが44%ですから、夏や秋には①のサクラソウ群落はヨシ群落に、②のサクラソウ群落はオギの混ざったオギ群落に変化するはずで、そこで、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地を示した図に、この調査を行ったサクラソウ群落の位置と、その群落と同じ構造の広がっている範囲を記してみました。すると、ヨシの混ざったオギ群落の範囲は地表の少し高い北側にまとまっていて、その他はヨシ群落の範囲になっていることが分りました。一般に陸地では水の多い土壌にはヨシ群落が、それより水の少ない土壌にはオギ群落が、さらに水の少ない土壌にはススキ群落が発達します。ここのサクラソウ自生地にはヨシやオギの群落が発達しているの、水に恵まれているといえそうです。

多くの場合、ヨシ群落やオギ群落の発達する場所の土壌にはサクラソウの生育に適した水の量が保たれていません。同じ草原にみえても、マコモやガマの群落が発達している草原では、土壌の水が多過ぎてサクラソウは生育できないし、ススキの群落が発達している草原では、土壌の水が不足するのでサクラソウは生育できません。



夏にはオギ群落となる場所のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



夏にはヨシ群落となる場所のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



開花最盛期のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)



保護増殖中のサクラソウ群落 (2000.5.4撮影)

いま、田島ヶ原サクラソウ自生地では土地が乾いて困っています。どうやら、すぐ隣りに造った公園の排水をよくしたことが原因のようです。そのために、ヨシ群落が見られなくなったばかりか、次第にススキ群落が広がってきました。この状態が進めばサクラソウは生育することが困難になるでしょう。このような田島ヶ原サクラソウ自生の現状と比べると、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地は、ヨシやオギの群落が発達していてサクラソウの生育にとって理想的な状態にあるといえます。そして、田島ヶ原サクラソウ自生地では土地が乾燥したために消滅したり希少になった、アリアケスミレ・ジロボウエンゴサク・ミツバツチグリ・ハンゲショウ・コオニタビラコ・ツルニンジン・コオニユリ・ノハナショウブなどの湿生植物といわれる仲間が、ここのサクラソウ自生地の中で元気に生育しているのを観察することができました。このような湿生植物が安定した生育を続けられるのは、自然環境に恵まれている証拠でもあります。今回の観察で、このサクラソウ自生地は土壌の水の量が保たれているという、優れた環境条件によって育まれていることが確かめられました。記録が残っていないので、はっきりとは言えませんが、かつての田島ヶ原サクラソウ自生地に土壌の水の量が保たれていた時代の姿を、「サクラソウトラスト地」の中にあるサクラソウ自生地で見た思いがしました。

(さいたま市文化財調査専門員 磯田洋二)